

学位論文題名

バルトリハリの時間論

－絶対者の「二つの力」－

学位論文内容の要旨

論文の構成 (目次)

はじめに

目次

序論

1 バルトリハリの著作

1.1 *Mahābhāṣyadīpikā*

1.2 *Vākyapadīya*

1.2.1 構成と内容

1.2.2 主要なテキスト・翻訳一覧

2 バルトリハリの思想的特徴

2.1 バルトリハリの人物

2.2 バルトリハリの年代

2.3 注釈者ヘーラーラージャについて

2.4 文法学の歴史におけるバルトリハリの位置

2.5 思想的特徴

3 VP.3.9. (*Kālasamuddeśa*) に対する先行研究

3.1 PeriによるVP.3.9.の内容構成

3.2 本論文の着眼

本論

4 *Vākyapadīya*の時間論

4.1 「絶対者」の時間論

4.2 VP.の時間論

4.2.1 *kālaśakti*

4.2.2 *pratibandha*と*abhyanuḥjā*

4.3 まとめ

5 バルトリハリと仏教の時間論

5.1 仏教語の使用

5.2 VP.3.9.49–61における議論

5.2.1 VP.3.9.49–56

5.2.2 VP.3.9.57, 58

5.2.3 VP.3.9.59-61

5.3 まとめ

6 『マハーバーラタ』に見られる妨害と許可

6.1 バルトリハリの時間論の特徴

6.2 バルトリハリ時間論との類似性

6.3 『マハーバーラタ』における類似箇所

6.4 まとめ

7 天体と時間

7.1 天体の動きによって区分される時間

7.2 『マハーバーラタ』における時間論との類似性

7.3 まとめ

8 ヴァイシェーシカ学派の時間論との類似性

8.1 VP.における時間論の特徴

8.2 ヴァイシェーシカの時間論との関連

8.3 まとめ

9 シャンカラ不二一元論との関連—avidyāとśakti—

9.1 世界展開におけるśaktiの役割

9.2 Vākyapadīyaにおけるavidyāの用例

9.3 シャンカラにおけるavidyā説

9.4 まとめ

結論

VP.3.9. (Kālasamuddeśa) 翻訳

はしがき

VP.3.9. 内容目次

翻訳

略号表

参考文献

索引

本論文の観点と方法

言語哲学者バルトリハリ(5世紀後半)の著した『ヴァーキヤパディーヤ』(Vākyapadīya, 以下VP.)における時間論の研究。第3章第9節「時間に関する考察」とヘーラーラージャ注の翻訳を併載。これまでのバルトリハリの時間論に関する研究はVP.3.9.における議論の紹介や問題点の指摘にとどまるものであったり、あるいはVP.3.9.のごく一部の研究であった。本論文では、VP.3.9.全体の議論をヘーラーラージャ(9-10世紀)の注釈を含めて詳細に分析し、それをふまえてバルトリハリの「絶対者」の時間論を様々な側面から検討する。また、バルトリハリの「絶対者」の時間論を通じて、彼以前のインドにおける万物の生成と破壊を司る時間という思想がどのように発展していったかというインド思想史の変遷を解明することに寄与する。

本論文の内容

はじめに 序論

1. バルトリハリの著作: MahābhāṣyadīpikāとVP.について、特にVP.の構成と内容、主要

なテキスト・翻訳一覧を挙げる。

2. バルトリハリの思想的特徴: 人物と年代、注釈者ヘーラーラージャについて紹介し、文法学の歴史におけるバルトリハリの位置と思想的特徴として、「語ブラフマン」と「スポータ」を挙げる。
3. VP.3.9. (Kālasamuddeśa) に対する先行研究: VP.3.9.を英訳したPeriの内容構成を挙げ、Periの要約の問題点を指摘し、本論文の着眼点を上述「本論文の観点と方法」の通り提示する。

本論

4. *Vākyapadīya*の時間論: 本論のテーマである「時間」について、バルトリハリのkālaśakti説、すなわち、ブラフマンは時間(kāla)と呼ばれる力(śakti)を有し、時間の力の働きは、pratibandha(妨害)とabhyanuḥjñā(許可)からなり、VP.に頻出する両概念は時間を前提としていることを明らかにする。
5. バルトリハリと仏教の時間論: 仏教語の使用が指摘されるVP.3.9.49-61について、注釈で引用されているサーンキヤ・ヨーガ学派の説と『俱舍論』等で説かれる有部の時間論には多くの共通点があり、VP.3.9.57で説かれる時間論と経量部の時間論には同じく観念的な側面があることを検証する。
6. 『マハーバーラタ』に見られる時間のVP.との類似性: 『マハーバーラタ』における時間は唯一絶対的なブラフマンと同一視されており、存在物の生成と消滅の原因として位置づけられている。その点においてはVP.における時間と同じものであると言えるが、時間の力(kālaśakti)、「許可」(abhyanuḥjñā, anu√jñā, prayojika)、「妨害」(pratibandha, pratibaddha, niyama)といった用例は『マハーバーラタ』に見られないため、確実にバルトリハリの時間論の起源が『マハーバーラタ』にあると言える証拠はない。ただし、この両方で説かれる時間の概念が類似することを多くの用例によって検証する。
7. 天体と時間: 唯一不可分の時間が、天体等の動きによって仮に区分を得て、世間で呼び習わされる様々な名称を獲得するというバルトリハリの時間論は、『マハーバーラタ』にも見られる。バルトリハリは叙事詩で説かれるような世間的な思想を取り入れつつ、独自の思想を展開していることを検証する。
8. ヴァイシェシカ学派の時間論との類似性: 時間の許可の働きによって存在物は生じ、妨害の働きによって存在物は消滅する。同じ妨害の働きによって存在物は存続し、妨害と許可によって生成・消滅を繰り返すことで時間的な順序が生じる。ヴァイシェシカ、あるいはニヤーヤの時間論に、バルトリハリの「妨害」と「許可」の時間論との明確な共通点が発見される可能性を指摘する。
9. シャンカラ不二一元論との関連 - avidyāとśakti-: シャンカラにおいて「付託」するものは「無明」であったが、VP.本文においては専ら「力」であるというように、シャンカラでは「無明」について語られるものが、バルトリハリでは「力」について語られている。このようにバルトリハリにおける「力」と「無知」の理論には意味合いの違いがあるが、明確な区別がされていなかったため、後のシャンカラ等の理論では「無知」の一つにまとめて説かれるようになったことを明らかにする。

結論

『ヴェーダ』以来の、存在物の生成と破壊を司る「絶対者」としての時間という思想は、

『マハーバーラタ』等の叙事詩に受け継がれ、それがバルトリハリにおいて文法学の伝統や仏教の理論を取り入れて彼独自の時間論となり、バルトリハリ以降はシャンカラの理論に影響を与え、ヴェーダーンタ学派の思想に継承されていったことを結論する。

翻訳: 以上、前半の研究編に対して、後半は、翻訳編として、VP.3.9「時間に関する考察」をヘーラーラージャの注釈とともに全訳する。これまで唯一の英訳であったPeriの翻訳を大幅に改良するとともに、索引として主要なサンスクリット語とその訳語を示し、難解なバルトリハリの用語を現代語として理解されることに注意深い配慮がなされている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 細 田 典 明
副 査 教 授 藤 井 教 公
副 査 教 授 千 葉 恵

学 位 論 文 題 名

バルトリハリの時間論

－ 絶対者の「二つの力」 －

本論文の研究成果は学界に様々な新知見を呈するものであり、以下に要約される。

1. バルトリハリと仏教の時間論に関して、注釈で引用されているサーンキヤ・ヨーガ学派の説と、『俱舍論』等で説かれる有部の実体的な時間論には多くの共通点があり、VP.3.9.57で説かれる時間論と経量部の時間論には同じく観念的な側面があるということ を明らかにした。とりわけ、有部の時間論と類似する雨衆外道のヴァールシャガニヤの引用がヘーラーラージャの注に見られることから、有部の時間論に近いものであると言えることを指摘した。
2. 「絶対者」の時間論という点で、『マハーバーラタ』におけるバルトリハリの時間論との共通点を新たに見出した。すなわち、唯一不可分の時間の分割 (Mbh.4.47.1-2, 12.217.52-53)。存在物の生じるもとである種子に喩えられる時間 (16.9.33)。存在物を生成・生滅させる時間 (1.1.187, 1.1.189, 6.4.2-3, 6.9.20, 12.230.19-20)。永遠不滅の時間 (6.32-33)。存在物を駆り立てる ($\sqrt{\text{kal}}$) 時間 (6.32.30)。川の流りに喩えられる時間 (3.36.1)。糸に喩えられる時間 (3.154.35)。成熟させる時間 (1.1.188, 3.154.34, 5.126.31, 5.130.3, 5.154.26, 8.27.24, 12.220.40, 12.220.84, 12.220.102, 12.231.25, 12.309.90, 17.1.3)。
3. 天体に区分される時間は、『マハーバーラタ』第12章Śānti-parvanのMokṣadharmā-parvanに含まれる第216-220章 (BaliとVāsavaの話)、および224-248章 (ŚukaとVyāsaの問答)、また、『マハーバーラタ』第13章Anuśāsana-parvanのDānadharmā-parvan (1-166)において集中的に説かれていることを見出し、唯一不可分の時間が様々な名称で呼ばれて分割されること (217.52-53)、時間が不滅 (aśāśvata) であること (220.92)、また時間が昼夜、一月等に区分されること (220.97)、語ブラフマン論 (224.60)、時間は多様であると同時に無始無終であること (224.71) 等、VP.との類似性を数多くの用例で検証した。

4. シャンカラの説く「無知(avidyā)」には世界展開の原動力と個人の迷いの原因という二つの意味があるが、バルトリハリの説く「無知(avidyā)」は専ら世界展開の原動力としてのもののみであることを論じ、両者の対比を通じて、シャンカラ以降のヴェーダーンタ思想にバルトリハリの思想が取り込まれていった過程を明らかにした。

5. 翻訳として第3章第9節「時間に関する考察」をヘーラーラージャの注釈とともに全訳。本邦初の翻訳であり、従来の英訳では不明瞭であった内容が大幅に改良され、今後のバルトリハリ研究のみならず、インド思想史研究に大きな貢献を果たした。

問題点として、このような「絶対者」としての時間という思想の変遷を明らかにするためには、さらに後期ウパニシャッドに説かれている、時間を万物の根本原理とする「時論師」の思想や、シャンカラ以降のヴェーダーンタ学派の時間論などを検討していくことが求められる。

またバルトリハリの時間論解明のためには、彼がとりわけ大きな影響を受けている仏教の時間論、具体的にはVP.3.9.85-88と関連がある中観派の時間論や、59に見られた経量部と関連する唯識や瑜伽行派の時間論をふまえた上で、VP.を読み解いていく必要がある。

以上の通り、本論にはいくつかの問題点は指摘されるが、各論においては、いずれも新知見を提示し、時間論を中心としたバルトリハリ研究に寄与するものとして評価される。

本委員会は、以上の審査結果に基づき、全員一致して、本申請論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものであると判定した。